

# 安全な「一定温給湯方式」の原点

～急激な湯温変化を避ける理由～

訪問入浴において、特に冬場は、ご利用者の「**血圧の変動**」をできるだけ避けるような工夫が必要です。居室の温度が低い場合、脱衣により寒冷刺激を受けて一過性の血圧上昇があります。次いで入浴時の温熱刺激でも、一過性の血圧上昇がみられます。しかし、体が温められことによって、血管が拡張し血圧は低下を始めます。

仮にこのような状態で、湯温を調整するために冷水を送水したりすると、冷水が体に触れてしまう場合もあります。その際、寒冷刺激を受けることで血管が収縮してしまうので、下降傾向にあった血圧が一時的に上昇してしまうので注意が必要です。

それらを避けるためにも、居室をあらかじめ暖めておく、37℃～39℃(微温浴)の湯温と一定温度の管理、洗髪から始めることで身体の末端より洗体するといったことをおすすめします。

入浴中においては、静水圧が働いて血圧低下は緩やかですが、出浴時に静水圧から解放されることで、一過性の血圧低下が起こります。下半身に血液の沈下が起こりやすくなるのが要因です。



程度が強いと脳貧血などがこの時点でみられやすくなります。

出浴後 30 分～90 分は血圧の低下状態が続きますので、冬場は保温を心掛け、ベッドで安静に過ごしてもらいます。

動脈硬化症の進展する高齢者の場合、血液粘度の上昇にも気をつけなければなりません。血液粘度に最も大きな影響をもつ因子としては、体内の水分が減少し脱水症状を起こしていることが考えられます。血液粘度の上昇は、42℃以上のお湯に 10 分間以上入浴する個とで起こりやすくなります。高温浴は避け、特に渴中枢機能(喉の渇き)や温度感覚が低下している高齢者には入浴前後に水分補給を促します。

出浴時はタンカでゆっくりと、入浴はもちろん微温浴で急激な温度変化を避けて短時間、そして半身浴にて行う必要があります。

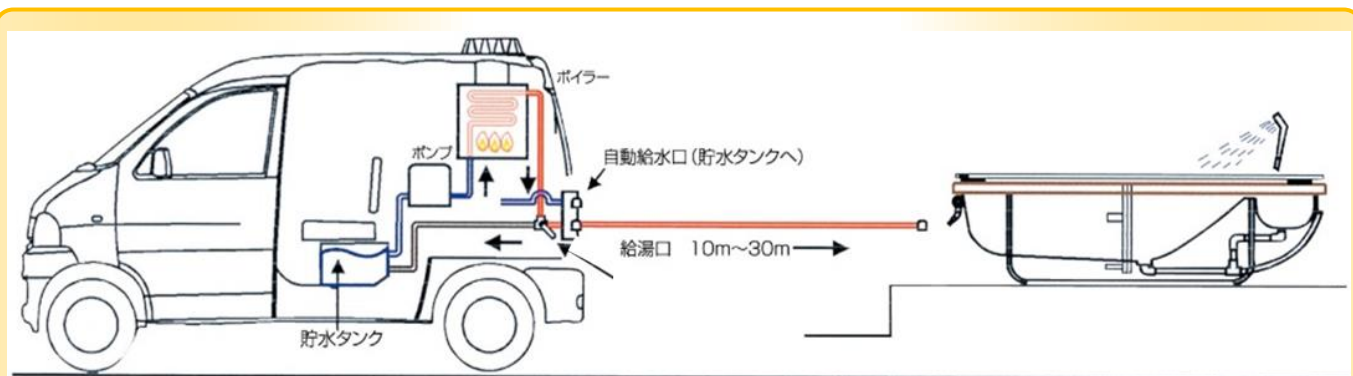
ハンドルを廻すと、タンカ  
ネットをゆっくり上げ下げ  
できます。



身体を動かすことなく、  
浴槽の中へ入ります。



何ととっても安全なのは「**一定温給湯方式**」であり、急激な湯温変化を避けるというデベロの給湯方式の原点となった給湯方式です。



## ☆一定温度による給湯

熱湯や、冷たい水を浴槽へ通水しないことで、ご利用者への危険回避にも繋がります。

## ☆ホース 1 本での効率化

定温ホースをひくことで、準備が早い。家の中を通すホースは 1 本で済みます。